徳冨健次郎
愛著

蘆花全集
第十四卷

日本から日本へ

第三卷

昭和五年三月刊行

昭和五年三月十日印刷
昭和五年三月十五日發行

非賣品

蘆花全集

著作權所有者　德富愛子

發行者　蘆花全集刊行會代表　佐藤義亮

印刷所　富士印刷株式會社

製本所　神田製本部　新潮社

發行所　東京市牛込區矢來町七十一番地（振替東京二七一〇〇）
新潮社內　蘆花全集刊行會
電話牛込（八〇五番・八〇七番・八〇六番・八〇八番・八〇九番

日本から日本へ　第三卷

目次

第十篇　英吉利

第一　Great Silence……四
第二　倫敦へ……三
第三　倫敦日記……三
第四　Oxford……六
第五　倫敦日記（續）……六九
第六　Scotland……一三
其一　Flying Scotchman……一三
其二　Edinburgh……一八
其三　Glasgow……二七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第二　紐　育……三四九
第三　入日を趁うて……三〇一
第四　桑　港……三一〇
亞米利加の女……三三〇

第十二篇　日本へ

第一　太平洋（前）……三四四
其一　新天新地　四海一家……三四四
其二　春洋丸……三四六
第二　布　哇……三五七
第三　太平洋（後）……三六九

第十三篇　日　本

其一……四〇四
其二……四一〇

第一　GREAT SILENCE

（一）

十一月十一日。眠がさめると、船房に私は寢て居る。向ふの Berth（バース）には妻ではなくて若い男が眠つて居る。佛英連絡船に寢て居るのだ、と云ふ事を思ひ出す。時計を見ると最早七時を過ぎて居る。

私は窃（そつ）と起きて身仕度し、婦人室に往つて見る。果して妻は醉つて苦しんださうだが、それでも眠れたのは好かつた。

甲板に出る。空はからり明けはなれて、寒い風が飄々（ひゆう〳〵）と北から吹きつける。それでも海はいくらか靜かになつた。五千噸の細長い Vera（ヴェラ）は海峽の波を蹴つて英吉利近く寄りつゝある。寒いので、甲板には出て來る客も少ない。右舷に往つて見る。正に日の出である。久しぶりに海の日の出を見る。日は出で、空は晴れ、而して北の烈風は波のしぶきで右舷甲板をびしよ〳〵に濕らし、寒いとも冷たいとも氷の矢を吹きかくるやうで、面を向けられぬ。それが私の元氣を喚び起す。

日の本の日子と日女との渡ります日をばうれしみ海を出づる日

Armada を沈めナポレオンカイゼルを泣かしめし一衣帶水今渡り行く

北の風氷の征矢を放ちつゝ日子日女迎ふ嶋夷共

私は食堂に入つて一碗の茶を喫し、Toast の一片を食べる。それから左舷の Recess の Bench にかける。海の色が薄綠になつて來た。汽船が煙を吐き〳〵駛つて居る。白い帆舟が搖られて居る。鷗が飛ぶ。何時となく英吉利の陸影が眼に入る。高低不規則な陸の側面を眺めて居ると、津輕海峽を渡りつゝ北海道を眺むるやうな心地がする。

妻が起きて來たので、私共は食堂に入つて、輕い朝食をとる。諸君は朝から魚の Fry など食ふてお出でる。

食堂を出た頃は、"Vera" は已に詩人 Tennyson の住んで居た Wight の嶋を尻眼にかけて、鷗を左右に散らしつゝ陸へ〳〵と進んで居る。海中から築き起したやうな海堡がある。

私共は流石に波立つ心で近づく陸を眺める。これが英吉利か。世界の家族會議で首座に坐わる長兄の國はこれか。私が十一歳から其國語を學びはじめて四十年になる其英吉利がこれか。其所領に日の入らぬこれが英吉利か。

寄つて來た陸がまたお出で〳〵をするやうに後退りはじめた。Southampton の入江に入つたのである。

兩舷の陸は此方に流れて、Southampton の港がやゝに寄つて來る。煙突や起重機や煉瓦の建物やトタンの倉庫や、立働く人、埠頭に待つ人の影が見ゆる。汽船や赤い Buoy の間を縫ふて、Vera が岸壁に横づけになつたのは、朝の九時半であつた。

（二）

船客はぞろ〳〵船を下りる。昨夜 Havre で妻がいたはつた鼻に怪我したあの婆さんの姿も、其中に見受けられた。黑服を着て居るのは、戰死した子の墓參にでも往つたのではなからうか。私共も手荷物を荷夫に託して、やをら英吉利の國土に下り立つた。

私は日を忘れなかつた。今日は 1919 年の十一月十一日である。十一月十一日——恰も世界大戰の休戰一周年の其日に、私共が英吉利に上陸するのは正に其時を得て居る。

旅客の注意こと〴〵しく張り出されて居る稅關内で、私共は、今 Vera を下りた乘客の人々と一同 Passport を調べられ、身分、目的、滯在期限等を問はれた後、更に構内の一の小舍に待つ可く要められた。其處には電氣暖爐が赤く燃えて居て、私共の外に三四人同じく待つ人々がある。瑞西や西班牙

の人々であつた。

他の乘客はぞろ〳〵汽車に乘る樣子。私共も心は心でないが、調べが濟まぬので、電氣暖爐の傍近く椅子引寄せて、係の人の今や來ると待つて居る。

其內追々十一時近くなつた。

此十一月十一日午前十一時、卽ち休戰滿一周年の此午前十一時に、英國では五分間一切の鳴を靜めて、大戰に斃れた人々を追弔記念のお布令が George V. から出て居る事を私共は新聞で知つて居る。誠にゆかしい思ひつきで、これが英國に限らず全世界時を同うし心を揃へて祈念を凝らすとしたら、如何に嬉しい事であらう！　何はともあれ、斯 "Great Silence" の日に英吉利に來合はせて四千萬の人々と死者——其內には女子供も家畜も居る——の前に感謝と懺悔——何となれば彼等を死なしたは畢竟我儕の罪であるから——の頭を低るゝ事は、嬉しい事である。

私は時計を見た。十一時に五分前である。

八年前の秋の一夜、武藏野の草廬に家族座を正して明治天皇輦車發引の相圖を待つた時の緊張が私共の椅子の居ずまひを正させた。

ド、ドド——ン！

壁を震はして砲聲が轟いた。
電氣暖爐がぱつたり消えた。
あらゆる音が止んで、森となつた。
私共は瞑目した。
私は此 "Great Silence" の五分間に世界の心的一周をして、且念じ且祝した。私は日本人だから私の祝福は私共の此旅の如く正に日本から始まつた。日本から朝鮮、西比利亞、支那、支那印度、馬來の邦々、印度、中央亞細亞から西亞細亞の國々、土耳其、埃及、亞弗利加の國々、露西亞、Scandinavia諸國、白耳義、和蘭、獨逸、墺地利、バルカン諸邦、伊太利、佛蘭西、西班牙、葡萄牙と思ひ浮べて祝ひつゝ英吉利へ來た時、電氣暖爐がぱつとついた。陸海の汽笛が一時に鳴りはじめた。"Great Silence" の五分は過ぎたのである。
然し私の祝福は全世界の何れをも漏らしてはならない。私は瞑目をつゞけて、英吉利から愛蘭、北米、南米、布哇から南洋濠洲と心を遊ばせて、一々祝福を贈つた。
隣室に足音がして、私共以外の人々が呼び入れられた。"Silence" を終へて、係の人が來たのであらう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

それ等の人々が出で去ると私共の番になつた。私共は椅子にかけて、白木の Table 越しに係の人々と相對した。正面の Khaki は四十近い大尉で、Roosvelt に一寸肖て居る。傍の若いのは黒服。大尉が重に調べる。兩肱卓子についたり、片肱突いたりして、しげ〳〵私の顔を見つゝ細かに調べる。無論さし紙が此處にも來て居るのだ。

私は日本出發以來行程の大要を述べた。獨逸を見に往つた事が、二人の係の注意を鋭くした。

「何の Authority で獨逸に往きました？」

大尉は問ふ。

「瑞西で獨逸公使館から旅券をもらつたのです」

「其旅券は？」

「鞄の中にあります」

大尉は細い眼で瞬きもせず私の眼を見つめた。私の大きな眼に、疲勞は浮いて居たらうが、謊はそこに認められなかつたと思はれる。私には何の祕密もないから。

「御夫婦で世界漫遊は隨分金がかゝりませう。あなたは金滿家ですか？　財産は何程おありです？」

旅券出願の時、東京府廳の係は私に財産の申告を要求した。外國に出て先々の厄介にでもなる事があ

つたら國辱だから、財産調査は無理でないかも知れぬが、私の財産申告を添へて旅券願が外務省に廻はつた時、其處の若い人達はこんなものをと笑つたさうだ。然し私は眞面目に私共の所有する土地、家屋、立木、屋内現在品、及び一切の預金現金を合はせて三萬圓と計上して、申告書に書いた。のみか、地所登記の書類、銀行の當座預帳まで自ら府廳に持參して、私の言の確實を證據立てた。地所は坪五圓で、少し高いと思ふたが、府廳の役人を安心さす爲に値を張つたのであつた。私の財産調べは、英吉利に來て忽ち役に立つた。

「約三千磅です」

と私は東京府廳へ申告のまゝを答へた。最も近頃は磅の値が下つて居るが、そんなに細かでなくてもの事だ。

「三千磅？　それで御兩人で一年間の漫遊とすると、如何しても全財産の半額は消えますね」

大尉は頗る合理的である。而して大尉の計算はそれでも内輪に見積つてある。何故なれば私共の世界一周は二萬二千圓を使ひ、私が戯れに言ふたやうに、日本から羅馬までは我足で歩いたが、羅馬から日本迄は義足で歩いたからである。義足と云ふのは、借りたおあしの義。

「然です」

大尉の眼は鋭くなつた。獨逸から金が出はせぬかと云ふ疑念が閃めいたらしい。誠にお氣の毒さま、あのけちなをぢさんが、加之ぎゆう〳〵云はされて居る今日此頃、唯の一馬克一 Pfennig も滅多に出すものか。然し大尉はさう思はない。

「あなたは著作家ですね。大約何部程著作がおありですか？」

「左樣、一ダアスもありませうか」

私は兎の糞のやうな貧弱な私の所產をきまり惡く頭の中に數へながら答へた。

「あなたは Successful author ですか？」

「然、Very popular です」

と私は正直に答へた。日本では "Popu'ar" は、劣等低級の別名として苟も文士の恥ぢねばならぬものゝやうになつて居るが、西洋人の前に立つて、「Popular です」と答へた時全く私は肩身が廣かつた。

大尉はいよ〳〵鋭く私の眼を見る。人を見るに眸子を見るよりよきはなし、と孟子の言を此英吉利の大尉も實行して居る。

私は言を添へた。

「私は Popular です。私共の旅行も讀者がさしてくれるのです。然し私の財産が三萬圓は愚、百萬長者で假令私があらう共、今度のやうな旅行をする爲には全財産を抛つても少しも惜しいとは思ひません。それに、文筆の人に金は必ずしも益をのみするものではありません。財布がふくらむと著作が凹むことになり易いものです」

力強い私の言葉がしつかり頭に入つたと見えて、大尉は顏を解いて頷いた。

然しそれで直ぐ手放す程の甘いをぢさんでもなかつた。歸つたら無論旅行記を書くが、それは單行本として出し、所謂新聞雜誌の記者ではない事を確めて、やつと私共の英吉利入國は許された。

訊問所を出ると、私共の手荷物と鞄が持つて來られる。大尉は追ひすがるやうにして、一寸獨逸の旅券を見せてくれと云ふ。私は鍵を撚つて黑い鞄の蓋を開け、直ぐ中子にあつた黃色い獨逸の旅券を取り出して大尉に渡した。眼にくつゝけるやうにしてそれを見て居た大尉は、それを私に戻すと目禮して去つた。

私共は初めて自由になつた。

第二　倫敦へ

（一）

汽車はとくに出てしまつた。私共は驛夫の呼んでくれた馬車で、荷物諸共 Southamp'on の港を他の停車場に往つた。荷夫に手傳ふて重い鞄を下ろすとして、六十餘の人の良い馭者が右の手の指を少し傷つけた。赤い血が私の頭を痛くする。馭者は何でもないと笑ひ、六志の馬車賃に十志をやると悅んで去つた。

私共は歩廊の雜誌店で、汽車の時間表を買ふ。剝製の黑い犬が頸に箱を下げて居る。倫敦のジョンと云ふ善良な犬と書いてある。箱は孤兒の爲。

待合室の暖爐にあたりながら、私共は汽車を待つ。薄靑い揃ひを被た十五六の物賣の娘が三人つり箱を下ろして、暖まりに來る。私共は Chocolate や近邊の產と云ふ柚子見たやうな Orange を買ひ、商賣があるかなど問ふたり、私共が世界周遊中で、妻の帽子は佛蘭西、靴は白耳義、手提は獨逸で買つた事や、獨逸の娘達の蒼ざめて居る話などをする。皆がしみ〴〵聽いて居る。

兎に角私共は英吉利に來た。英吉利に來たのは何と云ふても第二の故國に來たのだ。言葉の親しみがすべてを近くする。それにつけても日本を出て私共が過ぎて來た邦々で、其國語が自由に話せたら、自他の悅喜も多かつたらうに、と今越えて來た海のあなたの邦々に濟まぬ怠慢の罪を今更に感ずるの

であつた。

汽車が來た。荷夫が荷物を運び込んでくれた一等室は、私共唯二人。紺地に白模様の Cushion や、大きな硝子窓を上下する同じ織物の太い括紐も、英吉利らしい重厚な感じのものであつた。

"Lunch——Basket" "Lunch——Basket" と兵隊上りの若者が歩廊を賣りあるく。呼んで 3 志 6 片出して一つ買ふ。手細工に大きな平たい重いそれを Cushion の上に置いてくれた。

一時發車。

Basket を開ける。ハムと冷肉が一皿。セロリイとトマト。パンは四角が一切、小さい圓いのが一個、Tea Biscuit が二つ。Knife, Fork を添へ、芥子と胡椒と鹽を劃つた皿がついて居る。Basket の蓋裏には、どうぞ最寄の停車場でお出し下さいと注意書が貼りつけてある。好い氣もちになつて私共は英吉利最初の食事を汽車中でする。而して先刻買つた Orenge を Dessert に食べる。思ふた程酸くもなかつた。

内は Heat、外は小春の日かげら〳〵と、牧場や、のんびりした小川の流れや、人家や、木立や、如何にも長閑な景色がつづく。

雪の獨逸雨の佛蘭西海越えて英吉利に來つ小春日和よ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com